

---

# かみさまのいるばしょ

蛭猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

かみさまのいるばしょ

### 【Nコード】

N5763V

### 【作者名】

蛍猫

### 【あらすじ】

「実の親が依頼人とは憐れな娘。せめて死に方を決めさせてやる  
う」

「私、愛した人の腕の中で死にたいわ」

そうして始まる彼と彼女の恋愛ごっこ。

吸血鬼×鬼姫の娘の恋愛ファンタジー（予定が未定）

超亀更新の自前サイトからの転載です

## 1 - 0 (前書き)

書き方模索中 + 書いた時期がバラバラなので文体のバラつきが目立ちます。そもそもこのサイトの使い方もよく分からないド素人なので気になる場所があったら指摘してやってください。

明るい光がレースのカーテンを通して柔らかく六畳ほどの部屋を照らす。

カーテン越しの明かりがアイボリーの壁紙の薄暗い部屋の中と、ベッドの中に眠る少女を照らしている。

不意に、掛け布団の中から飛び出した少女の右腕がピクリと動き、次いで起きようか二度寝しようかと葛藤するかのように眉間にシワが寄り、数秒の後に少女は掛け布団をはねあげガバリと勢いよく身を起こした。そのまま少女は遮光カーテンの引かれた窓へ近づき、カーテンを破るような勢いで左右に開ける。朝の光が差し込み部屋は一気に明るくなった。

夏の空は嫌味なまでに晴れ渡り、今日も暑くなるのだろうかと簡単に予想できた。

朝日に照らされた少女の体は全体的に線が細かった。肌の色はぬけるように白く、小柄で細身。今にも折れそうなやせ細った体。

外の景色をボンヤリと見つめる目は闇夜よりもなお黒く、その目にわずかにかかる髪もまた烏の濡羽のように黒い。

頬のラインで切った髪は寝癖であっちこっちがツンツンと跳ね、

襟足の髪だけが長く伸ばされうなっている。

彼女は今の今まで寝ていたというのにパジャマではなく、ピッタリと体に沿うような形の桜色のワンピースを着ていた。

「……いい天気。今日は河川敷にでも行こうかなあ」

髪を丁寧に梳いて後ろ髪を一つに括り、冷たい水で顔を洗う。タオルでゴシゴシと顔を拭く頃には目も完全に覚めていた。財布だけをポケットに突っ込んで玄関へ向かうと築三十年のボロアパートの廊下はミシミシと不穏な音を奏でた。

古びた鉄製のドアに付いた郵便受けを情性的に覗き込むと、珍しく何かが入っている。それは分厚い封筒だった。表には筆で「片平逢様」と書かれている。

「……今月の分か」

逢はその封筒を無造作に開けた。予想通り中にはキツチリと束になった折り目もない大量の万札が詰まっている。毎月恒例の風景だ。

逢には母親が居ない。だいぶ昔に死んでしまった。その時の記憶はなぜか無いのだけれど周りの口さがない者達が逢のせいで死んでしまったと噂話をしていたのを聞いたことがある。そして唯一の肉親であるはずの父は逢に憎悪と言っても過言ではない感情を向けていた。やはり母は自分のせいで死んでしまったのだろう。それなら憎まれて当たり前だ。むしろ自分のせいで死んでしまったというのに何も感じないなんて薄情な娘だと現状を認識していた。

逢は一度廊下を引き返し、台所で封筒を冷蔵庫にしまった。クーラーなどついていない蒸し地獄のようなこの部屋で、冷蔵庫から流れ出る冷気が頬をかすめて少し気持ちがよかった。

気を取り直して今度こそ重たいドアを開ける。とたんにカツと差す日の光と暗い日陰のコントラストが目には焼き付いた。どうやら昨日の天気予報が言っていたことは的中したらしい「八月一日、降水確率0、熱中症にご注意ください」と。

逢は自分の前にできる濃い影を踏みしめるようにして歩いた。逃げ水でも見えそうな熱された道路の中、他に人影は居ない。みんなクーラーをガンガンに効かせた室内でテレビでも見ているのだろうか、妙にひがんだ気持ちでひたすら足を動かす。

そうしていると近所の河川敷までの距離などあつという間だった。

水面を渡り幾分か冷やされた風が吹きぬける。ざわざわと背の高い草が風に揺れて、静かな風景に音を添えていた。逢はゆっくりとガードレールを乗り越え、土手を踏みしめて降りる。靴の底で潰れ

た草が放つ青臭い匂いが鼻に届き、逢はその匂いに少しばかり眉をしかめて今降りた場所より少し先に見える高架下へ歩を進めた。なんの変哲も無い近所の川原のどこにでもありそうな高架下、そこが逢のお気に入り場所だった。



高架下が作り出す影に入ると、目の裏まで届きそうな強烈な日差しが遮られ、眩しさに慣れた視界はつかの間真っ暗に染まった。逢は目が慣れるまでの数秒、歩みを止めて目蓋を閉じる。だから、気付くのが遅れた。いつもは誰も居ないその場所に先客が居たことに。

「こんにちは」

逢がその声に引き寄せられるように目を開くと、そこに居たのは一人の少年だった。ともすれば黒のようにも見える瞳は深い紫の色をしていて、面白がるようにこちらを見ている。

血の気が失せたような病的に白い頬にかかる髪は黒灰色で、彼が小首をかしげると頭の高い位置で無造作に括られた髪が動物の尻尾のように揺れた。

真夏の、しかも晴天の日であるにもかかわらず、少年は場違いな程に厚着であった。生地の厚い真紫の長袖のダボツとしたパーカーに同じくダボついた黒のスウェットのような長ズボンを着き、奇抜な色のスニーカーがアスファルトの段差から投げ出された足がパタパタと揺れる度に左右交互に曲線の軌跡を描いた。

「えーと、片平逢、さん。だよな？」

「なんで私の名前を……？」

名乗ってもいないのに己の名前を口に出した少年に逢は驚き後退りした。この少年と何処かで会ったことがあるだろうかと考え、すぐに否と答えをだす。こんなに目立つ外見の人を覚えていないはずがない。ならばやはり逢と少年は初対面なのだ。

少年はそんな逢をチェシャ猫のような笑いを浮かべながら眺め、ほがらかに話し掛けた。

「はは、そんなにおびえなくてもいいのに。俺の名前は竜胆。花の竜胆と同じ漢字な」

「竜、胆……さん？」

「呼び捨てでいいよ、お嬢さん」

そう気安さを滲ませた声で言うと、竜胆は腰をおろしていたアスファルトの段差からやおら立ち上がり、ググツと伸びをすると、なめらかな動きで逢の真正面まで歩いてきた。

「それで君への用件なんだけど、君は自分で死に方を選べるとしたらどんな風に死にたい？せめて自分で決めさせてやるよ」

至近距離から逢をまっすぐに見つめる猫のような瞳が僅かに陰った。

「殺しにきたよ。お嬢さん」

ザッ、と一陣の風が吹き、遠くで鳴く蝉の声が逢の耳に届いた。

「……そう」

「驚かないんだな」

「多少驚いてはいるわよ、でも誰が依頼したか多分だけど分かるもの。…あの人、とうとう事故に偽装することすらなくなったのね」

「君は一体何をやらかした？ずいぶんと憎まれていたようだけど」

竜胆は心底不可解だとも言うかのような表情で問いかけてきた。

その顔がなんだか可愛いくて逢は少し笑いそうになった。憶測だが竜胆は優しい性格なのだろう。なにせ殺害対象に死に方を決めろと言うくらいだ。問答無用で闇討ちするわけでもなく、見逃してくれるわけでもなく。ただ望みのままに殺してやろうと。

本来忌まれるべきのその中途半端で残酷な優しさが逢にはひどく好ましく思えた。闇に身を置く人とは思えないほどの、甘いすら

思えるその性格。

だから、逢は笑いながら告げた。少しだけ、竜胆という少年に興味が湧いたから。

「私ねえ、あの人には殺されて当然だと思ってる」

逢は一度言葉を切り、目蓋を閉じた。相変わらずミンミン、ミンミンと急かすようにがなりたてる夏の音に耳をすませるように首を傾げる。そうしていると短い夏に命を歌う声に懐かしい響きが混じったように感じた。そういえばもうすぐお盆だったなどとりとめない思考が頭をよぎる。

逢ちゃん、と今度は蝉の声に混じってではなく、明確に己を呼ぶ声を思い出す。いつも脳が思い出す母親は姿も声も鮮明で、呆れるくらい美しく笑っていた。逢は自分の覚えている数少ない母親の言葉を思い出す。『逢ちゃん、恋をしなさい。大きくなって、ああこの人だ。と思う人に出会えたら、それはとても幸運なことなんだから。もしそんな人に出会ったなら離しちゃダメよ』

恋はいいものよ、恋をしたら、世界はもっと鮮やかになるんだから、と言う母親の声が耳の奥でこだました気がした。

「だけど、うん、竜胆、私は私の死に様を決めたよ」

そうして相手の目をまっすぐに見据えて一息に言い放つ。

「私は恋をして、愛した人の腕の中で一生に幕を引きたい」

きつと鮮やかな世界の中で愛しい者に包まれて迎える死は幸せだろう。と強い光を宿しながらも見る人に空虚な印象を抱かせる瞳が笑う。

「竜胆、私に恋をさせてよ。私を惚れさせたら、貴方の勝ちだよ」

竜胆は予想外の返答に目をしばたかせ暫し呆然とした顔をしていた。そんな彼を見て改めて思う。生に執着があると言えるほどあるわけではないから勝ちも負けもないのだが、竜胆とだったらきつと恋ができる。そう思った。記憶の中で美しく、幸せそうに笑う母の顔。自分もあんなふうに笑えるだろうか。

竜胆は仕事から帰ってくる時、いつも寂しそうな、少し悲しそうな、そんな瞳をしている。

そうして決まって私を抱きしめるのだ。微かに血の匂いがする、その腕で。

私の彼氏は、殺し屋だ。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ただいま」

朝の光の起こされ情性のようにノソノソと居間に出ると、玄関の方から竜胆の帰宅を知らせる声が響いた。

「おかえりー。ていうかオハヨウ？今日も立派に午前様だねえ」

少し前から同居人になった彼にそう皮肉気に言い返してみれば、  
「なんだなんだヤキモチか？」というニヤニヤ笑うような声が返ってきた。あいついつぺん豆腐に頭ぶつけられればいいのに。逢は朝から疲れたような溜め息をこぼした。

そのままソファに座ってボウとしていると、ほどなくして居間に姿を見せた彼は、いつも通りグシヨグシヨの濡れ鼠だった。彼が歩いてきた跡が一目で分かるほど水が垂れている。逢は無言で洗面所に行くと、ひつつかんだタオルを竜胆の顔面めがけて全力で投げつけた。水を切ってから家に入ってと言っているのに聞いてくれたためしはない。いったい誰の家だと思っているのだろう。

竜胆は顔の前で器用にタオルを掴むと、水の始末をしに玄関の方へ消えていった。その背に「朝ご飯作るけど食べる？」と聞くと「いる」という返事が返ってくる。ならばと逢も食材の確認をするべく台所に向かった。

竜胆は大体昼間は眠っていて、夜になると起き出し時々フラリと何処かへ行く。おそらく別件の仕事なのだろう。そうして朝方に帰ってくる頃には大抵ビシヨ濡れになっているのだ。最初は驚いたものだけでももう慣れた。もしや逢が知らないだけで最近ヒットマンという単語は水の中に潜る職業を指すようになったのかもしれないとすら思う。冷蔵庫を開けると賞味期限ギリギリの大量の卵という恐ろしい物を見つけてしまった。どうしよう、これ。



\*\*\*\*\*

フライパンに油をしき、溶いた卵に昆布茶を目分量で入れた物を流し込む。卵の焼ける音が耳に心地いい。今日は殻が上手く割れたから、もしかしたら殻のカケラが混入していない卵料理が食べられるかもしれない。自分で作っておいてなんだが、あのフワフワのオムレツやツルンとした茶碗蒸しを食べている時に混入した殻を奥歯ですり潰してしまった感覚は鳥肌ものだ。あのジャリリっ…と軽快に響く不愉快な音

が頭蓋の中に木霊するようで凄まじくテンションが下がる。自分で作っておいてなんだが。

「今日は出汁巻き卵？」

「！」

ほどよく火の通った薄焼き卵を破かないように慎重に丸めていると、急に背後から伸びてきた両腕が逢の首に巻きついた。そのまま後ろに引き寄せられ、バランスを崩した拍子に菜箸が一文字の線をフライパンに描く。卵には見事な穴が開いた。締め付けられた気道に呼吸が狭まる。コイツは私を此処で絞め殺す気なのだろうか。

逢の半眼の視線など何処に吹く風とばかりに、竜胆は引き寄せた逢の肩に自らの顎を乗せ、フライパンの中を覗き込んでいる。

「りん、竜胆。苦しい。絞まってるから」

「ん？ああ、悪い悪い。どーにもなー、力加減がなー、わかんねーんだよなー」

とりあえず首を圧迫する腕をバシバシ叩きながら抗議すると、本当に今気付いたらしい、うっかりうっかりと言わんばかりに軽く謝られ、やや腕がゆるめられた。首を解放してくれる気は無いらしい。横目で睨むと、まったくお前は脆いなと言わんばかりの顔で見返してくる。アンタが頑健すぎるだけだ、この馬鹿力。

卵と油の匂いに混じり、密着した体からは微かに鉄錆の匂いがした。命の、匂い。

「……また、仕事だったの？血の匂いがする」

「殺す事が商売なんでね」

「早く転職すればいいのに」

本日最大級の皮肉のつもりで言っただけだったが、苦笑と共に肩をすくめられただけで流されてしまった。

## 2 - 1 (後書き)

このあいだ食べた学食のオムライスに卵のカラが混入してました。  
食堂のおばちゃん・・・・・・・・

「一応聞いていいか、これはなんだ？」

「だしスクランブルエッグ。途中まではだし巻き卵になるはずだった」

「……お前、一昨日もカニ玉になるはずだったカニスクランブルエッグとか作ってたよな」

「文句言うなら食べなくてもいいんだから！おいしいじゃん餡かけカニスクランブルエッグ！」

だしまき卵をスクランブルせざるおえなくなつた元凶を睨むと、本人は眉を寄せてブツブツ言いながら炒り卵寸前のスクランブルエッグをつまんでいた。

そんな竜胆をボンヤリと見つめていると、数日前とはずいぶん遠い所に自分が立っているような気分になる。竜胆と出会ったあの日の朝と、同じ家だというのに。

料理を作れば文句が返ってくる。何かを話せば、相槌が返ってくる。

なんだかそれは、とても不思議な気分で。

そんなことを考えていると、いつの間にか竜胆が箸を止めこちらを見ていた。

虫を観察するような ひどく無機質な瞳で。微かに背筋に鳥肌が立つのを感じた。この人は、いつもこんな顔をして他者を屠っているのだろうか。

「お前は本当に変だな。いきなり見ず知らずの他人と、しかも自分を殺しにきた奴と住むことになったのに、動揺も警戒もない」

竜胆が頬杖をつきながらそう言う。かつてに住み着いた張本人が何を言うのだろう。直前までのどこか緊張した空気が破れ、なんだかドツと肺に空気が入り込んだような疲労感を味わった。しかし、そうか。

この人には、何の違和感もなく自然体で暮らしているように、見えるのか。

「べつにそういうわけじゃ、ないよ」

洗面所に、自分以外の着替え。

話しかければ、返ってくる声。

違和感。

やはり、他人と暮らすというものには、まだ慣れない。

「ただ、何をどう思おうと最終的に行き着く場所が同じなら、一緒でしょ?」

そうして逢は微笑む。自分はちゃんと綺麗に笑えているだろうか。

それだけが、少し心配だった。





ああ、諦めているのだな。そう思った。

あの娘は最初から何もかもを諦めているんだ。

だって、笑うその瞳には 何の感情も、浮かんではいなかったのだから。

最初から、日常がどう変化しようと、心に波紋が広がるわけがないのだ。

空虚な瞳を見つめて、そう気付いた。

\*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

一緒に住むようになって、気付いたことがある。

「なあ逢、この家ってなんでクーラーねえの？」

「そんなの、取り付ける場所が無いからに決まってるでしょ。暑いの嫌なら駅前のデパート行つてきなよ。そこでデパートに住め」

「あーそれいいな。下にコンビニがあるマンションとかに住むより便利そうだ、それ」

昼下がり、今日も今日とて太陽は遮るものもなくギンギラギンに輝いていた。蝉は鼓膜を破壊せんばかりに鳴き、その合間に近くの公園で遊ぶ幼子らのキャラキャラ笑う声が響く。

竜胆と逢は、揃いもそろって居間のフローリングに頬を付ける様にヘタリと床に倒れこんでいた。べつに死体ごっこなどというシャレにもならない遊びをやっているわけではない。この状態が一番涼しいのだ。

竜胆自身は寒さ暑さにそんなに弱い訳ではない。むしろ強い方だ。しかし、いささか今日の暑さは酷すぎた。逢などは恐らく寒暖にあまり強くないのだろう。今日は今までで一番最高気温も最低気温も高いという情報をテレビの天気予報で聞いてから、ずっと死んだ魚のような顔をしている。そうして先程おもむろに床に倒れこんだ時は熱中症かと焦ったが、「……涼しい」という呟きと共にフローリングに頬ずりをしているのを見て、彼女なりの涼の取り方なのかと理解した。竜胆もやってみなよと逢流の涼の取り方を推奨されて言われるがまま床に突っ伏してみると、なるほど座っているよりは

幾分かマシのような気がする。

そうして、現在に至る。

暑さに頭をやられたような馬鹿な話をとりとめもなく交わしていると、蝉や子供の声に混じって、何処からか祭りの太鼓や笛の音が微かに聞こえてくることに気付いた。それから神輿を担ぐ男達の掛け声のようなものも。

「逢、あの音は？」

「……今日は近くの神社で夏祭りがあるから、その音じゃない……？」

心底テンション低空飛行というような単語がふさわしいような表情で、逢がボソリと呟いた。喋ると体内温度が上がるとでも思っているんだろうか、この娘は。

「ふーん……なら日が暮れたら行ってみようぜ」

「……竜胆そんなの興味あるの？」

「逢は興味無いのか？」

逆に問いかけると、逢は考え込むようにユルユルと目をふせた。長い睫毛がフワリと揺れるその様をボンヤリと綺麗だと思う。

「外に出るのは、あんまり好きじゃない」

「この引きこもりが」

「うるさい。竜胆には私の気持ちなんて一生分らないに決まってるわ」

一緒に住むようになって、気付いたことがある。

逢は何かに答える時、いつも目をふせるようにする。目が合うのを恐れるように、まるで綺麗に貼り付けた嘘が露見するのを恐れるかのように。

薄暗い境内に、電気の雪洞の赤い光が無数に揺れている。

「外に出るの嫌だつて言ったのにいいいい……」

逢は鳥居をくぐりながら竜胆を恨めしく思った。昼に交わした会話は自然と途切れていき、話はそこで終了かと思っていたのだ。夕方、竜胆に文字通り外に引っ張り出されるまでは。

誰にも言った事はないが、逢は神社や教会など、人の信仰が集まる場所が苦手だった。そういった場所に居ると、何故か頭が締め付けられるように痛むのだ。今も例にもれず痛みだし、神社に着いてすぐにフラリと何処かに行ったきり姿の見えない竜胆への悪態を吐いて、石でできた鳥居の根元に座り込み膝を抱えた。

何かを信じる力というのは人類最大にして最強の武器だと、思う。想い、そして信じる力は時に摂理を捻じ曲げ神さえをも作り出すほどの念へと変わるのだ。人は思い込みで死ねるし、時には病すらも治す。

だから逢は、怖かった。聖なるモノを信じ悪しきモノを払うと疑う事もなく思われている。神に縋り、強い念を集める場所が。人の信じる心という途方もないエネルギーが。

きつとその苦手意識が頭痛を引き起こしているのだろう。自分もまた得体の知れない思い込みという力に体調を左右されているという事実には苦笑いが浮かんだ。結局は自分も同じなのだと。

「具合でも悪いのか？」

つらつらと持論と矛盾と竜胆が帰って来たときに言ってやる恨み言を考えていると、噂をすれば影とばかりに耳元で聞き覚えのある諸悪の根源の声がした。振り返る前に背後から何か冷たい物がうなじにヒタリと当てられ、ひゃつと上ずった声が出てしまった。

「竜胆！一体な……に……」

逢の怒声は、振り返って見た光景のギャップに驚きすぐに勢いを無くしていった。だって、いったいこれはどういうことだろう。

いつも通りに真夏にも関わらず長袖パーカーをはおった彼は、境内で賑やかに商売をする出店から買ったのだろうか、鮮やかな赤に染められたカキ氷を二つ持ち、一方を逢に食べとばかりに差し出している。おそらく今うなじに当てられたのはコレだろう。

そこまではいい。問題はその表情だった。

軽く笑みを刷いた白いかんばせ。元々血の気の失せた様な顔色は赤い雪洞の光に照らされても尚、青ざめて見えた。眉間にはシワが寄り、目じりには疲労の色が微かに見てとれる。そう、その表情は逢が今しているであろう顔と同じに見えて　　気がつけば直感的に問いかけていた。

「竜胆、もしかして頭痛い？」

「……………」

「体調悪そう」

「……………なあって気付くかな、お前は」

竜胆は諦めたように逢の隣にドカリと腰掛け、こめかみに力キ氷の器を当てた。そうしてふと空いた方の手で逢の頬に触れ、眉をかめる。ずっと冷たい物を持っていたからだろうか、竜胆の指はヒンヤリしていて気持ち良かった。思わず擦り寄るようにして自らの頬を寄せる。彼は逢のそんな仕草を見て猫のようだと笑った。

「具合、悪いか？帰るか」

「それは竜胆の方なんじゃないの？神社苦手なんでしょう」

肯定は無言の沈黙で返ってきた。刹那、何かを考えるように見つめられ、何と聞き返す前に納得したように視線は外される。

「お前も、神社苦手だったか。……連れ出して悪かったな」

苦笑いと共に髪をかき回すようにして頭を撫でられる。力が強いせいで頭がつられてガクガクと揺れた。ちよつと脳震盪になりそうだ。現在進行形で体調を悪化させようとしているのは竜胆ということに気付いてほしい。

逢は頭の上にある竜胆の手をすげなく叩き落とした。

「別にいいよ。知らなかったらしょうがないじゃない。それに、神社に行ったことが原因で具合が悪くなるなんてイレギュラーな事態、普通予測できないでしょ」

つつけんどんに言い放ったのに、竜胆は柔らかく笑うと、そうだな、帰るか。なんて言って立ち上がり空いている方の手を差し出してきた。意味が分からず困惑していると、「手」と言われる。いや手は分かっているよ確かにそれは手だよなどと思っていると、意思の疎通は諦めたのか無言で片手を握られた。そのまま引っ張られるよ



うにして立ち上がる。ここで初めて手を差し出された意味がギブミーマナーでも手相鑑定の要求でもなく手を繋ごう。ということだったのかと気付いた。隣の竜胆は鈍感め、と半眼でこちらを見ている。あまりにも目が口よりもモノを言っている状態に逢は心の中で反論した。

分かるかつ！！しょうがないじゃん今までそんなこと要求してる人居なかったんだからっ！

あくまで心の中だけで叫ぶ。口に出す代わりに逢は竜胆が答えづらそうな質問をちよっとした意地悪のつもりで聞いてみた。

「そういえば、なんで竜胆は神社とか苦手なのに私を連れ出して此処に来ようなんて思ったの？」

逢が苦手なのを知っていたというのなら嫌がらせかと思うところだが、竜胆はそれを今知ったばかりだ。しかも自分がこっぴった場所が苦手なことを自覚しているのに、何故自ら行こうなどと言いつたのか。意地悪のつもりだけれど、腑に落ちないのも確かだった。

「……逢、知ってるか？今日と同じ日なんて一日もないってこと」

何をそんな当たり前の事を。そう言おうとして、逢は竜胆の真摯な瞳に固まった。

「例えば俺達の会った日、外はどうだった？それは今日と同じか？」

そんなものすごく当たり前の事だけど、たぶん竜胆が言いたいのはそういうことじゃない。なんとなく、そう思った。

「知ってるか？世界は意外と綺麗で、同じ時は一度もなくて、人間の短い生の中で時間は有限だ」

竜胆は一度言葉を切り、青すぎる夏空のようにカラリと笑った。

「もったいないだろ？」

価値観の押し付けだとは、何故か思えなかった。外には色んな物があつて、色んな発見があつて。

逸らしていた目を向けた先の世界は美しい。そんな理由のために、自分が苦手な場所に逢を引きずり出して来たのか。この一瞬を無駄にするなど言いたくて。

逢は熱を持った頬を隠すようにそっぽを向いて、ぶっきらぼうな声でつぶやいた。

「…………おせっかい」

ああもう、まぶしいなあ。夜だというのに、竜胆の笑みが酷く眩しく思えた。

一緒に住むようになって、気付いたことがある。

時々虫でも観察するような、酷く無機質な顔で世界を見ているくせに、竜胆は本当に子供のように晴れ晴れと笑う。

見上げた空に浮かぶ朧月の光が優しく、湿った追い風が祭の喧騒と熱帯夜の匂いを運んできて、  
繋いだ手が、暖かくて。  
ガラスに映った景色のように認識しづかった世界に昨日よりも近づいたような気がして。

逢はつられたようにくしゃりと笑った。



### 3 - 2 (後書き)

え、でも神社によつては頭痛したりしますよね．．．．．？少数派じゃないですね．．．．．？

その女を見たのは、本当に偶然だった。

\*\*\*\*\*

竜胆はその日、仕事を終えて夜の繁華街をフラフラと歩いていた。パーカーのフードを深く被っているにも関わらず、通行人とぶつかることはない。フードからはみ出た濡れ髪から乾ききらない雫がポタリと落ちた。

仕事が終わったなら水をかぶって血の匂いを落とす。それは竜胆のポリシーだった。血の匂いなど纏っていたくない。一刻も早く落としたいとすら思う。彼女が聞いたら、それは矛盾だ。そんな仕事をしているくせにと笑うだろうか。

竜胆はつい最近出来たばかりの「彼女」を思い出してクスリと笑った。

逢は不思議な娘だ。殺しに来たと言ったのに怯えも揺れも無い、まるで老木の洞のような空虚な瞳で此方をまっすぐと見返してきたかと思えば恋がしたいなどと夢見がちな少女のようなことを言い出す。実際少女なのだから、そんなことを考えてもおかしくはないのだが。

なぜだかあの全て諦めたような空気を纏う彼女とは、とことん縁の無い言葉のような気がしたのだ。今時の、ただの娘だというのに。

その違和感に興味を引かれて、気がついたら条件を了承していた。選ばせてやるとは言ったが、こんなに長期戦に持ち込むつもりなどなかったのに。

おかげで掛け持ちでいくつか仕事をやらざるおえなくなってしまうった。

そんなふうにして現状を作り出した原因の娘のことを考えていた時だった。通り過ぎようとしたビルの間の薄暗い横道。その闇の中で何かが動いたような気がして、竜胆は足を止めた。

目をこらしてよく見てみたが、特に何も無い。しかしそのまま視線をなんとなくビルの上に移した竜胆は、普通人間社会で見るものでは無い光景を見た。

人が、跳んでいた。

煌々と光る赤い満月を背後にビルとビルの間を、あきらかに人間ではない跳躍力で。

こちらが見ていることに気がついたのだろうか。夜空を舞うその影が、一回ビルに着地した後、こちらへ向かって飛び降りてきた。

一般的な人間が落ちれば普通グシャグシャになる高さを、人影は猫のように難なく着地する。一拍遅れて背に流された長い髪がフワリと舞った。

深く被ったキャスケット帽、口元は巻かれたストールに隠され見えない。何処かの学校の制服だろうか、深緑のプリーツスカートから伸びた足は真夏だというのにロングブーツに覆われていた。

そうして、星のように瞬いた金の目がこちらを真っ直ぐに睨む。目があったと思った瞬間、何故か一瞬心臓が音を立てて跳ねたような気がした。

まるで、気高き孤狼を見たかのような、そんな印象。



「ふん、悪鬼がうついておるから狩ろつと思つたのに、お前フ  
ランスカとローデルハイドの縁者か」

澄んだ声が響く。耳馴染みのいいその声をよく知っているような  
気がして、竜胆は言われた言葉の意味を理解するまでに少しかつ  
た。

「なんだそれ、誰と間違えてる？俺はそんな奴知らないぜ？」

「知らなくてもお前は二人の血縁だよ。お前の匂いはあの女によ  
く似ている」

「それを言うならお前も俺の知ってる奴によく似ているよ」

彼女とはずいぶん違う雰囲気だけれど。

「ふん、そうだろうよ」

思いがけない肯定を匂わせる声に、どういことだと問い返す  
より早く、少女は竜胆に背を向けた。

「何処行くんだ？」

「……お前には関係なかるう」

少女は肩越しに竜胆を振り返るようにして睨むと少し不快そうに眉間にシワを寄せ、目をふせるようにして渋々答えた。何かに答える時に目をふせるようにする、そんな仕草すらなんだか彼女に似ているような気がして竜胆は可笑しくなった。ついついそのまま彼女にするようにキャスケットの後頭部を撫でると、今度こそ完全に振り返った少女に射殺されそうな殺意に満ちた目で睨まれてしまった。

「さわるな」

ブンと振りかぶられた腕を避け、竜胆はついだとばかりにその鋭い爪の手を掴んだ。避けていなければ今頃顔が血まみれだ。

「うおっと、そう怒んなって。ついうっかり。まあ、それはいいとして、お前が何処行こうと確かに自由だけど、せめて人里をうるつくつもりなら爪はしまえ。それからビルの上を飛んだりとかも止めろよ」

「余計なお世話だ」

「うるせえ、自己保身の延長線上だ。お前みたいなのが一般人に

見つかるとゴシップ誌とかが騒いで超迷惑」

その言葉に少女は嘲笑うように目をすがめた。

「そちらこそ、一般人を気取るつもりなら私を見て悲鳴の一つでも上げたらどうだ？そして逃げ惑うがいい」

竜胆は肩をすくめてその言葉を流す。少女の言葉は正論だが、そうして衆目を集めた場合は双方が大変困った立場に陥るのである。

かたや人間の括りの外に居て、かたや警察のお世話になりそうな商売だ。

「まあいいけど。その帽子は絶対取んなよ」

「……よく分かったな」

「さっき頭撫でた時に手に当たった」

驚いたように目を見張る少女にニシシと笑うと、また不愉快そうに睨まれた。つくづくよく睨んでくる少女だ。もしかして嫌われているのだろうか。頭を撫でたのがよっぽど気に喰わなかったのかも

しない。

少女に嫌われるのは、なんだか嫌だった。だがその思いに反する  
ように、もっと少女を怒らせてみたいとも思う。

満月のように金に染まる瞳が怒りを、感情を宿して爛々と輝く様  
の、なんと美しいことか。まるでそれは宵の明星の光のように路地  
裏の闇の中で竜胆を惹きつけた。

薄暗がりの中でス、と背を伸ばして佇む少女は、未だこちらを睨  
んでいる。そういえば少女の名前すら知らないことに今更ながら思  
い至った。

通りすがりに、偶然出会っただけの異形の少女。ただそれだけの  
ことなのにここまで興味を引かれるのは何故だろうと竜胆は己に首  
を傾げる。もしかしたら、少女が妙に彼女に似ているせいかもしれ  
ない。

「お前の名前、なんていうんだ？」

「……ふん、しょうがない。フランススカの血縁であるお前には  
敬意を払ってやる」

だから俺はフランススカとかいうソイツを知らないんだって。その言葉にする前に少女が動いた。

頭に被ったキャスケット帽を取り胸元に持ち、膝を折るようにして僅かに身体を傾ける。

目をふせて礼をとるその少女の額には        二本のねじれた角。

「鬼姫紅葉が娘。授けられた名はアヤメ        自分では殺女と名乗っている」

漆黒の長い髪が夜風にザワリと揺れる。目をふせたその姿は、やはり逢とよく似ていた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

「ただいまー」

「あ、おかえり竜胆。ていうかオハヨウ」

居候している逢の家にとり着く頃には、夜が明けていた。目をこすりながらノソノソと起き出してきた逢と出くわしたので、とりあえず抱きしめる。世にいう恋人というものはおそらく四六時中こんなことをやっているのであろう。

「……竜胆、血の匂いがする。仕事帰り？」

「ああ。……匂うか？川で落としてきたつもりだったんだけどな」

「ああそう……川！？だからちよつと藻の匂いもするの！？うわああちよつともう離して！！移る！藻の匂いが移る！！」

腕の中でジタバタ暴れるくぐもった声が面白くて、竜胆は笑いをこらえて腕に力を込めた。

「いいじゃん。共有しようぜ。なんか世のカップルって大体みんなこんな感じのことやってるんだろ？」

「そんなのカップルに対する偏見だ！藻の匂い共有するカップルなんて居るかー！！ぎゃあああ本当に離して！藻の匂いがする女子

高生なんて嫌ああああ！」

腕を離して逢の顔を覗きこむと、心底迷惑そうな、不快と嫌悪を織り交ぜたような複雑な色の目をしていた。間違っても恋人に向ける類の目では無いと思う。

でも、流れの止まった湖面のような顔よりは、ずっと好ましい。

竜胆は逢が全力で嫌がるにも関わらず、もう一度強く彼女を抱きしめた。

#### 4（後書き）

人間外に遭っても動揺しない竜胆。

ファンタジー色強くなってきたなあ・・・



## 5 (前書き)

遠い日の話

母は、気がつけばいつも南の空を見上げていたような気がする。

「ねえお母さん、南の空には何があるの？」

それは逢の一番古い母親との記憶。

世界は輝いていて、逢は自分が愛されて当然だと思っていた。

「それはねえ逢ちゃん？南の空・・・南十字星の浮かぶ空には神様が居るのよー」

「かみさま・・・・・・・・かみさまがいるの？」

南の空には神様が居て、虹の麓には幸せが埋まっている。海の青は誰かの涙が溶けた色で、夕暮れの茜はお日様がさよならを言う、優しい色。

すべては輝かしい、幼き日の思い出たち。

母の逝った日。

見上げた空は今にも泣き出しそうに曇っていた。

寒い寒い、如月の日。

輝かしい世界、色鮮やかな記憶は閉ざされた。もう戻れない。前に進むしか、道はなかった。

「始末にいつまでかけるつもりだ」

飴色をしたマホガニーの椅子に深く腰かけた男が、長い毛足の柔らかな絨毯を土足で踏みつける場違いな程にこの空間から浮いている少年をにらみつけるように低く呟いた。

遮光カーテンが引かれ薄暗い部屋は、壁一面の本棚に収納された本のせいだろうか、古びた紙の甘い匂いがした。

竜胆はその匂いを吹き飛ばすような深い溜め息を密かにつき、氣をとりなおすとトレードマークのニヤニヤ笑いを口元に浮かべる。

「もう暫し。それより……貴殿があの子を消したいと思う理由、お聞かせ願えませんかね？」

「……聞いてどうする」

「別に何も。ただ、自分が使われる理由くらい知りたがっても構わないでしょう？」

男は暫し、言葉を選ぶように沈黙した。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あれは……私から最愛の妻を奪った。……だがそれだけではない、あれは、あの娘は……異質だ……」

机の上で組んだ両手が、震えている。

不意に竜胆は理解した。

この人は、自分の娘に、怯えているのだ。

\*\*\*\*\*

ミシリ、背骨が軋むような音と息を飲むような痛みで逢は目を覚ました。

眠っていたらしい。毛布の下で丸めた身体が汗ばんでいるのが分かる。

逢は体が悲鳴をあげるのも構わず、ゴロリと仰向けになった。

夢を見ていた。

懐かしい、夢を。

ふと時計を見ると、針は最後に見たときより短針が僅かに遅れており、確か明るかったはずの窓の外は真っ暗だった。

そこから導き出される答えは、今現在の時刻、寝入ってから約12時間経過。

「……まじでか。お昼ごはん作るの忘れたー……」

竜胆はどうしているだろう。最後に見た時は居間のフローリングに死体のように倒れ伏して爆睡していたが、昼飯を作るが食べるかと聞いたら半分寝言で食べると言っていた。

そして、作る前に意識が落ちて現在に至る。

やばい。竜胆怒ってるかな……。何か自分で食べてるといいけど……。

「り……竜胆？……りんどうさーん……」

機嫌を伺うようにソロリと名を呼ぶが、返答は無かった。

ゆっくりと体を起こし居間の方を見ると、薄闇に静まり返った空間に人の気配は無く、ただ逢の声の余韻だけが落ちているようだった。

居ないのかな……夜だし、出かけてる……？

そのまま布団を出ようとし、逢は不意に襲った苦痛に再度顔をし

かめた。

肋骨が折れそうなほどの圧迫感。

「……う、つく」

たまらずに今起き上がったばかりの布団に倒れ、ズルズルと潜りこむ。

寒い。

夏だというのに鳥肌が立っているのが分かる。痛みのせいなのか、それとも別の何かなのか。

もう慣れる程経験したはずなのに、恐怖すら感じるような激痛は、未だに辛い。

逢は自嘲するように頬を歪めた。

「はっ……またか」

小さい頃から、時折こういう風に体調を崩した。普段は健康そのもののなのに、年に数回、体を裂かれるような激痛に倒れるのだ。そしてそのスパンは年々短くなっている。

その痛みが他の人には訪れないのだと知ったのは、だいぶ幼い頃。気付いてから誰かにこのことを言った事は無い。

医者にも一度も行かなかった。何故だかこの痛みは医者にかかったところでどうにもならないものなのだと本能的に理解しているよ  
うな、そんな認識だった。

この体は、弱すぎる。

その事実が心を蝕む。

今も、心を折らんばかりに続く痛み、気付けば唇は勝手に奴の名前を紡いでいた。

「……竜胆……」

そうして自分の言葉を耳で聞いて愕然として、答えが返らないことに落胆している自分に恐怖した。

一体何を考えているのだろう。今までずっと一人だった。何度も冷たい静寂の中で体を丸めて耐えてきた。今さら奇妙な同居人が居ないだけで何が変わるというのだろう。返事が返ってこないだけで

何を落胆しているのだろう。

いつも通りじゃないか。そう冷静に自分に言い聞かせる心とは裏腹に視線は暗く沈んだ居間を見つめ続ける。

心臓がドクリと嫌な鼓動を刻んだ。

静かな空間。

誰も、居ない。

まるで、夢の続きが襲ってきたかのような、息苦しさ。

怖い。

いやだ、いやだ、こわい。

混乱して焦ってゆく心の片隅で、冷静な部分がこの体たらくを嘲笑うのが何故だか分かった。

「わたしは、よわくなった」

はたしてそれは奴のせいだろうか。自分のせいだろうか。

「りんどう」

痛みに細めた目から、ポロリと一粒、心が溢れた。

\*\*\*\*\*

フワリ、頬を撫でる優しい感触に、逢はまどろみに落ちた意識を引き上げられた。

「起きたのか？」

低く柔らかな声が耳元で聞こえて、訳も無くホツとする。ああ、温かい。

そのまま、無意識に声の方へ擦り寄ろうとして、自分の隣に灰色が見える事態に気付き、次いで眠気が一気に吹き飛び現状を把握し

てしまった。

カーテンの隙間から零れる、朝の光。

ベッドで目覚めた、自分。

同じベッドで逢を抱きしめたまま寝ぼけている……いや、ほぼ完全に寝ている、恋人。

「ギャフン!!」

「……俺、驚いてギャフンって本当に言うやつ初めて見……」

竜胆の言葉の後半が寝息に代わる。逢はちゃぶ台をひっくり返すような勢いで叫んだ。

「寝るなっ!! まず腕を離して! ていうか状況を説明してから寝落ちろおおお!!」

「あー、勝手に部屋入って悪かったって……女の子だもんな、うん。無断で部屋入られたら嫌だよな。……だからそんな耳元で怒鳴るんじゃねえよハニー……」

「寝ぼけてないで起きろ!」

やっと体に巻きついた腕が離れる。そのままそもそも竜胆は上半身を起こした。ようやく起きる気になったようだ。逢も叫びすぎて痛くなったノドに手をやりながら起き上がる。最近竜胆と一緒にいるとどんどん女子力の低くなっていく自分を感じる。言葉づかいとか。困ったものだ。

「で、なんでベッドインしてるのアンタは」

「……しょうがねえだろ。それより昨日は死んだように眠ってたけど、具合悪かったのか?」

なんでしようながなかったのか問い詰めたかったところだけど、都合の悪い話題（ご飯すっぱかし）が出てきたのでとりあえず黙ることにする。すると竜胆は何を思ったのか「ちよつと待ってな」と言い残しノソリと部屋からゾンビのような足取りで出て行った。あの人絶対低血圧だ。

そのままボンヤリしていると、台所で何やらガチャガチャやっていた彼がマグカップを片手に戻ってきた。トレードマークの笑顔が



手の中の液体に不信感をプラスしていることにはたして本人は気付いているのだろうか。手渡されたそれは鼻を突き抜けるような凄まじい草の匂いがした。

「飲め」

「何……これ、何が入ってるの」

「これか？俺特製栄養ドリンク」

見事なまでに原材料が分からない壊滅的なネーミングセンスだった。おおかた匂いから判断するに漢方系の煎じ薬に近いのだろう。ただ色が妙に透き通って綺麗なのが、匂いとアンバランスで実に不気味だった。

しかし顔をしかめたまま一向に飲まず固まっている逢にしびれを切らしたのか、竜胆が手を伸ばしてくるのが見えたため慌てて液体を一息である。

竜胆はどうも「目的のためなら手段を選ばない」という言葉を理解していないようなところがある。むしろそうするのが当たり前だと思っっているような、罪悪感を覚えず自然体で強硬手段や実力行使に踏み切ることがあるので怖いのだ。たぶんあのまま硬直していれば鼻と口を押さえられ無理やり流し込まれたか、もしくは口移しだ。そうなる前に自主的に動くに限る。

凄まじく苦いのだろうと予測していた飲み物は、予想に反して仄かに甘い水のようなだった。

「飲みやすいだろ？」

「ほんとに何が入ってるのコレ……」

匂いだけが漢方の甘い水。それだけでも不思議なのに、起きてからも付きまとう昨日の残滓のような気だるさが、完全に消えていた。驚くべき即効性にいぶかしむ逢に、竜胆はいつものように笑いかけるのだ。

「企業秘密だ」

## 7 (前書き)

伏線はるだけはる回

ずいぶんと暫くぶりに、ただいまと言う習慣がついた。

ただ、それだけのことなのだけれど。

\* \* \* \* \*

依頼主との交渉が終わり帰る頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

仕事をしたわけではないので水を被る必要も無く、竜胆は無断で網を破壊して侵入したビルの屋上からボンヤリと景色を眺めていた。なんとなく、彼女に会えるような気がして。

夜闇の気配を纏い駆ける、少女。

聞きたいことがたくさんあった。だがそれ以上に、言いたいことが一つだけあった。

「アヤメ……か」

ただ一度、邂逅した鬼姫。その名前が無意識のように唇から零れた時、風が、吹いた。

「気安く我が名を呼ぶな、小童」

「よお、会いたかったぜ、鬼姫サマ」

なんとなく、来ると確信していた。

屋上と空を隔てるフェンス。その向こう側に、まるで彼女は夜空に浮かぶように凜と立っていた。

竜胆は空とフェンスの間の狭い足場に佇む彼女と背中合わせにな

るような形で、境界線の金属にもたれかかった。ギ、と重さを受けてソレが軋む。

姿は見えず、だが気配はとても近くに感じる。不思議な距離感だ。竜胆は肩越しにふり返るようにして彼女を見つめた。

「なあ、そこ危なくねえ？足場狭いし、こっち来れば」

「誰にものを言うておる」

そう言い嘲るようにクツクツと笑う彼女からは、仄かに血の香りがした。芳しい、命の香り。

この女が返り血を浴びるなどというミスをするはずがない。ならば本人のものなのだろう。どこか怪我でもしているのだろうか。

「ずいぶん良い匂いさせてるじゃねえか。何を屠った？」

「……悪鬼よ。この街に巢食い、闇に生まれ闇に生き、ヒトを喰らう者」

彼女が不意に此方を向く。金の瞳が自分を射抜き、いつかのよう

に心臓が跳ねたのが分かった。

ああ、なんて鮮烈な瞳なのだろう。いいね、ゾクゾクする。  
「おつかねえ女だな。孤高の鬼姫様はそうまでして何を守ってるんだ？街の平和なんてガラでもないだろ？」

答えは薄々見えていた。因果関係は、ある。

ただ、彼女の言葉で聞きたかった。

「この匂いを芳しいと言うのなら貴様も相当な気狂いだ」

いや、お前は元々そういうモノか？そう笑う少女の笑みは侮蔑を含んで酷く艶めいていた。

「お前も、奴らと共に屠ってしまおうか」

「俺は依頼を受けてんだよ。約束したことはキッチリこなさないといけないだろ？」

彼女の父親から 逢を消せと。

彼女から 恋をしたならば消えてもいいと。

正直生きていることに辟易したような、そんな目をしていたから、彼女が出した条件は不思議を通り越して不可解な印象を竜胆の中に積もらせていった。

だが、面白い。

逢と居ると、近年稀に見るほど満ち足りた気分になるのだ。

「あのな、俺、長い間決めた家とか無しで放浪してたんだよ」

「……それがどうした」

おや、珍しい。このツンデレ通り越してツンしかない鬼姫サマは自分の独り言じみた話題に付き合ってくれるらしい。

竜胆は中天にポツカリ浮かぶ月を見上げながら、続けた。

「同居人がさ、俺が帰ると、眠そうな目え擦りながら、いつも必ずお帰りって言ってくれるんだ」

ああ、今日は満月か。明日の飯は月見うどんとかいいな。まだ暑いが彼女に頼んだら作ってくれるだろうか。そんな事を考えてしまふほど、彼女に『慣れて』しまった自分に気づいた。

「帰る場所が、できた。ただいまって、言う習慣ができた」

たわいもない話、くだらない冗談。

何か言えば、返ってくる声。

「ただそれだけのことなんだけどな」

それだけの、こと。

ただいつもどこか違うから、調子が狂う。

「……ふん、獣が牙を抜かれて腑抜けおったわ」

殺女は常と変わらぬ無表情で空を見上げている。ただ、その瞳にはどこか温かい光が宿っているようにも見えた。

「そうそう、この間帰ったら珍しくお帰りって言ってもらえなくてよ。どうしたのかと思って部屋覗いたらソイツすごい苦しそうにうなされてたんだ。泣きそうな顔のまま寝言で誰かを呼ぶもんだか

ら、つい抱き締めたまま眠ったんだよ。そしたら目え覚めた時ものすごい勢いで怒られた」

「あたりまえだ。夜更けに女の部屋に無断で入るなど。この獣が」  
…… ああ、やはり。

自分で仕掛けておきながら、予想通りの結果に感じるのは落胆か、喜びか。

竜胆はフェンスにもたれていた背を離し、静かに殺女を振り返った。

その気配につられるように、彼女も竜胆を見る。  
視線が、交じり合った。

「聞きたいことが、たくさんあるんだ」

フランスカとローデルハイドって誰だ？お前は『いつ』から生きている？何がお前をそうさせる？

それよりも。

「だがそれ以上に、言いたいことが1つだけあるんだ」  
夜風に髪をはためかせ。凜と立つ孤高の美しい女。  
今代の鬼姫。

自分はこの女を 殺さなくてはならない。

「お前は、逢だな？」

ザアアア。

唸るように、2人の間を風が吹き抜けた。

## 番外（前書き）

「ここまでのあらすじ」：友人との会話でハロウィンで朝チュンな話を書くことになりました。

しかし現時点での関係性じゃ竜胆と殺女が夜通し戦った末の朝チュンしか浮かばない。ので、竜胆が吸血鬼だってばれてて二人が既にガチ恋仲という前提でがんばってみました。もう朝チュンするにはこれしかないんだ…！

## 番外

10月末日。それは、逢が床に座り込んで一心不乱に工作作業をしている時のことだった。

「よお、ただいま」

いつの間に帰ってきたのだろう、逢が声の方に振り向くと、恋人がリビングの壁に体を預けるようにして立っていた。

いつも通り、びしょ濡れの状態で。

「三日ぶり……くらいか？」

「四日よ。ていうかアンタそれどうしたの……」

そう、ちょうど四日前だ。竜胆が大口の依頼が入ったと銀灰の髪をなびかせてこの部屋を出ていったのは。

逢はタオルを取りに行くのも忘れてどこか茫然と竜胆の姿を眺めた。

白い壁にもたれて苦しげに荒い呼吸を繰り返す彼。伏せられた瞳は光の具合で色を変える沈んだ紫ではなく全てを飲み込むような漆黒で、頬にかかる髪も最後に見た時とは違い鴉の濡れ羽色をしていた。

それが伊達や酔狂のイメチェンなどではなく、竜胆が本当に疲弊している証なのだと、逢はもう知っている。



逢が彼に駆け寄りその体を抱き留めると、竜胆が崩れ落ちるようにフローリングに座り込むのはほとんど同時だった。

「うわっ藻の臭い！」

「そう言うなら離せて。お前まで濡れるぞ」

分かつてはいたが逢では竜胆の体格を支えきれはるはずもなく、なかば彼の下敷きになるような状態で一緒に座り込んでしまった。

竜胆は憎まれ口を叩きながらも、自分から動く気は無いらしく、おとなしく逢の肩に頭を預けている。

「こんなボロボロになって……いったいどうしたの」

「ハハ……ちょっとつかりミスをな、久しぶりにてこずった」

仕事は失敗したのかと問えば無言で懷から小切手を出してみせる。一応依頼は終わったらしい。悪童のような目で笑っている。

彼の髪と目は力のバロメーターだ。魂の糧として毎日血を飲んでいれば力は増し、髪は白銀に輝き目は紫青に色づく。

そして逆もまたしかり。今の彼はまるで只人のようだ。血も飲まずに治癒に力を使いすぎたのだろう。喉の渇きも酷いはずだ。

「喉乾いてるでしょう。待ってて、今包丁持ってくるから」

そう言って立ち上がろうとするが、竜胆は何を思ったか億劫そうに

両腕を逢の背中にまわしてきた。

そのまま強い力でギリギリと抱き潰されると、肺が圧迫され空気が出ていきくらくらししてしまう。アバラがミシリと嫌な音を立てたような気がした。この男はもしかして未だに自分の命を狙っているのだろうか。これは抱擁でも拘束でもなく、攻撃だ。

「いらねー。つうかお前なんでいつも包丁なんだよ。痛いだろ切り傷」

包丁という単語だけで竜胆は逢の意図を正確に把握したようだ。顔が近いせいか、苦々しく響く声が耳に直接吹き込まれているようで、ひどく落ち着かない。

「うん…でもたぶん竜胆に噛まれても相当痛いと思うよ。だって、その牙で首ぶっさすんでしょ？」

そう言う逢は至近距離にある口元の牙をチラリと見た。決して細くは無いソレ。はたして切り傷と刺し傷ではどちらが痛いのだろう。そんなことを考えていると、不意に竜胆の拘束が緩んだ。助かった。正直苦しくないふりもそろそろ限界だったのだと安堵の息をついた。タイミングでベロリと濡れたものが首筋を這う。動脈をなぞるように舐められたのだと分かった瞬間、羞恥心で顔面が爆発するかと思っ

った。  
「べつに、噛んでも俺の唾液で傷口ふさがるだろ」

「いやそういう問題じゃないっていうか、……竜胆切り傷も舐めて治すよね、どっちにしたって一緒じゃん」

そう、平静を保って言うのが精一杯だった。

「二度手間だろ。なんか他に理由でもあんの」

だというのに、やはり彼はいつも通りデリカシーがないというか、あえて空気を読まない。

「……」

「……」

逢は火照る頬を見られないようにうつむきながら、渋々白状した。

「だって……首筋に牙たてられるとか…恥ずかしい。むり」

「今更その程度恥ずかしがるような仲かよ」

「デリカシー!!」

あまりにあげすけな返答に思わず意味の分からないツツコミをいれてしまった。全くもって乙女心を介さない男だ。

しかし言い分的には竜胆は正しい。まさしく二度手間なのだから。

ならばここはもう先手必勝戦法を取るしかない。人生いつだってやったもん勝ちなのだ。

逢は竜胆の腕の中から身をよじり抜け出すと、彼が帰ってくるまで勤しんでいた工作に向かって手を伸ばした。目的はさっきまで使っ

ていた小刀だ。

しかし、

「こんな物騒なもん床に置いてくくなよ」

竜胆はこんなときばかり素早い。疲れきってるくせに。

逢はあとちよつとのところで先に奪われた小刀を睨み付けた。

「つつか、ソレ。何やってたんだよ。料理という名の毒薬作りか？」

「失礼なっ！こないだジャガイモの芽とらないで肉じゃが作ったのまだ根に持つてるの？」

「てつきり俺はお前と心中させられるのかと思った」

そう言つと竜胆は片手で小刀を弄びながら今晚の夕飯疑惑のかかった憐れな工作物に目を向けた。

中身をくり貫かれ、三ヶ所ほど歪な穴を開けられてるそれは

「……南瓜？」

「今日はハロウィンなんだよ！」

「……ああ、お前あれか。あの合成獣みたいな顔したのジャックランタンだったのか」

相変わらず不器用だなあという副音声がまるで聞こえてくるようだ。

手先の器用な竜胆に言われると返す言葉も無い。

「もおお別にいいじゃん！ジャックランタンは怖い顔じゃないと意味ないでしょトリックオアトリート！！」

「語尾みたいに菓子要求すんのやめろ。ほら、これやるから」

ご、と半ば叩かれるように額に押し付けられたそれは、夕陽の色を集めたようなコロリとした果実だった。

「柿だ！」

「もうそんな季節なんだなー。仕事終えて目撃者居ないか確認したら、たわわに実っててつい土産にもいできちまった」

つまり殺害現場から持ってきたらしい。まったくもって竜胆らしい繊細な配慮への無頓着ぶりだ。

「生臭い現物支給をどうも……」

「それで？お前は無いのか」

「え？」

「トリックオアトリート」

忘れていた。むしろ今日帰ってくるなどと思ってなかった。と言ったら許してくれるだろうか。

「つまり忘れてたんだな？」

「ご名答。さすがは竜胆である。こんな時ばかり勘がいい。

「南瓜をくりぬくことで頭がいつぱいでした……」

「じゃあいたずらだな……いや、やつぱ現物支給でいい」

そう言うやいなや竜胆の手が再び逢を囲う檻になった。今度は攻撃ではなく拘束である。

「なあ逢、吸血鬼はな、体内を巡ってる精気を血を通して喰うんだ。なら牙の生え揃わない子供はどうやって飢えを満たしていると思う？」

なんとなく、嫌な予感しかしない。というか今コイツ、「お菓子」を「現物支給」と言わなかったか？

「これがなんと、驚いたことに少量なら口付けからでも精気が喰えるんだよ」

通販番組風に告げられた衝撃の新事実、逢の中の嫌な予感を嫌な確信に変えた。

「竜胆……あんたがいつもキス魔なのって……」

自分がわなわなと震えているのが分かる。なんだろう、この驚きとも怒りとも羞恥ともつかない感情は。

対する竜胆は逢の様子に、いやあな笑顔を浮かべ、細く白い彼女の首筋を撫で上げた。

「こんな綺麗な肌に、傷なんてつけないわけないだろ？」

そうして言いたかった文句は息ごと封じられる。

さらには浮遊感に足が浮く。

逢が抵抗と酸素の確保に必死になっている間に、竜胆は実に軽々と逢を抱き上げてしまった。

「……！」

次にドサリと投げ捨てられたのはスプリングの効いたベットの上だった。何が起こったのか把握する前に竜胆のヒンヤリした手によって両目を覆われる。その手つきが意外なほど優しくかったから、だから思わず逢は動きを止めてしまったのだ。

「俺さ、今すごい腹減ってるんだよね」

耳元に囁きかけてくる竜胆の声は酷く艶やかで、閉ざされた視界の闇に消えていった。

\*\*\*\*\*

引かれたカーテンの向こう側で小鳥の鳴く声が聞こえる。その音で逢は目を覚ました。

「朝……」

寝返りをうつとすると何故か体が動かない。怪訝に思つて見ると趣味の悪い紫色パーカーの腕が、腹のあたりを拘束していた。

「……」

とても嫌な予感にデジャブを感じつつ固まる逢の耳元に、密やかな声が吹き込まれる。

「おはよう。気分はどうだ？」

「夢みたい……」

悪夢の方なっ！！



## 番外（後書き）

もはやパロディですね分かります。

本編とは別の何かだと思ってください・・・・・・・・！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5763v/>

---

かみさまのいるばしょ

2011年11月3日01時08分発行